



あまいろだより

手づくり市民メディア

vol.55

2024.3.15

120年続く私設図書館 こほく 江北図書館



江北図書館 新館完成セレモニー / イベント 《うれし！めでたし！本ざんまい！》

江北図書館に新しいコミュニティスペース「Lib+ (リブプラス)」オープン！

日時 2024年3月31日(日) 10時～16時
会場 江北図書館にて
滋賀県長浜市木之本町木之本 1362(木之本駅前)
0749-82-4867
kohokutoshokan@gmail.com

イベント盛りだくさん /

- ▶ 木之本一箱古本市「いろはにほん箱」(10時～16時 / 雨天中止)
- ▶ Lib+ 完成セレモニー(10時10分～)
- ▶ 「パンやのポポさん」読み聞かせ(11時～、14時～)
- ▶ 「すいーとほーんズ」ホルンコンサート(12時～)
- ▶ お菓子まき(13時～)
- ▶ 南陀楼綾繁氏ミニトークショー(13時半～)



江北図書館 HP



Instagram



何度も洗ってつかえるエコラップ Beeswax Wrap ミツロウラップ 販売中 !!

オーガニックコットンの生地にミツロウ(たまばん@信楽のニホンミツバチのミツロウ、オーガニックミツロウ)とオーガニックココナッツオイルと松ヤニをいい塩梅にブレンドして、あまいろ探偵団が手づくりしています。

(監修 Biwabochi ちまり)

- ▶ 取扱店 Base For Rest (東近江)、自家製酵母パンひとつぶ(能登川)、NPO 碧いびわ湖(安土)、自然食品と生活用品の店 hana(草津)、cafe あわいさ(信楽)
- ▶ 発送ご希望の方は、あまいろだより FB・インスタにメッセージにてお問い合わせください。(送料別途)

- Sサイズ 13x13cm (半分に切ったリンゴなどに)
- Mサイズ 20x20cm (お皿に残ったおかずなどに)
- Lサイズ 26x26cm (サンドイッチやおにぎりなどに)
- LLサイズ 28x40cm、36x36cm (キャベツ半分などに)



あまいろだよりにご意見ご感想をお寄せください
amairo.media@gmail.com

あまいろだより(天色便り)第55号
特集 江北図書館
編集 あまいろ探偵団
(北岡七夏・志堂未来・中野和子・藤井朋子・森優子)
表紙タイトルロゴ 岸田知之
発行日 2024年3月15日
発行 特定非営利活動法人碧いびわ湖
～大切なことを他人まかせにしない。自分たちで力をあわせてつくる～
TEL 0748-46-4551 FAX -46-4550
Eメール info@aoibiwako.org
ブログ http://aoibiwako.shiga-saku.net/
びわ湖の森を元気にするkikitoペーパーを
使用しています(びわ湖の森の間伐材活用) *kikito

二二〇年続く私設図書館
こほく
江北図書館

北国街道の宿場町として栄え
今も昔ながらの古い町並みが残る湖北の町
滋賀県長浜市木之本町に
県内で最も古い私立図書館
江北図書館があります

「未来を支える子どもたちと
地域に暮らす全ての人たちの
文化向上のために」

創設者の思いを受け継いで
地域が守り続けてきました
木造二階建て
二階には畳敷きの大広間
洋風の雰囲気を持つ建物の一角で
館長の久保寺さん
司書の稲館さんにお話を聞きました

プロフィール



くほでら ひろこ
久保寺 容子さん

江北図書館館長。古書店「あいたくて書房」の店主でもある。町がひとつの図書館になることが夢。好きな食べ物は、固めのプリン。



いなだて さちこ
稲館 幸子さん

江北図書館司書。10年間の学校司書の経験を経て、江北図書館に勤務。図書館をこよなく愛する。好きな食べ物は、4連のじゃがりこ。



私立図書館の始まり

あまいるだより(以下あ) まず江北図書館の歴史を聞かせてください。



久保寺容子(以下久) はい。ここは私立の図書館です。前身となるのは、一九〇二年に杉野文彌が作った杉野文庫です。杉野という人物は余呉町の出身で、あまり裕福でなかったために大変苦勞された方です。苦學をして学校に入って、それから弁護士になりたいという志を持って東京に出ます。東京に出たけれども、本をかうお金もなく、どうしようも困って歩いていたら初めて図書館というところに出会った。それまで図書館なんて見たことも聞いたこともなかったけれど、ここだったらわずかなお金で勉強ができる大変感動しました。当時の図書館は無料ではありませんでした。貸し出しは行ってなくて、閲覧にお金がかかっています。それでもとても安く勉強ができるというので、図書館に通って無事に弁護士になれました。その勉強をしながら、こんなにいとこを自分の故郷にも作りたくて決心されました。その後節約をして、また、本を集めて、それで地元杉野文庫を建てられました。それが農村地帯だったために利用者は少なく、維持が危ぶまれます。そこで一九〇四年に地域の有力者の協力を得て、中心地であった北国街道沿いの郡役所の中に移転します。伊香郡議事堂の一部を借りて継続し、一九〇七年にはそれまで全くの個人でやってきたものを財団法人化して、『財団法人江北図書館』という名前に変更をしました。これがいわゆる江北図書館の始まりになります。

一九〇九年には同じ敷地内の旧税務署庁舎の建物を利用して、広い閲覧スペースを備えた本格的な図書館として新たなスタートを切りました。郡の補助もあり、それから創設者の杉野の援助もありで続いていくんですけれども、一九二六年になると郡役所制度がなくなり、その後その建物自体も取り壊しをされるというところで、一九三七年に街道沿いにある旧

江北銀行に移転します。

その後、間もなく戦争が始まります。この辺はそんなに戦争の影響というのはいくつかないんですけども、それでもどうしてもお金の回りが悪くなって、運営は大変だったと伺っています。ただ、戦争があってもずっと図書館は開いてました。

あ へえー！

久 開館されていて、利用者も通っていらしたという記録が残っています。当時の日記には、八月十五日も開いていて、図書館でラジオをみんな聞いて、その後屋からはお休みにしますというのが残っています。翌日も休みますって書いてて、でもその後はまたずっと開いていましたし、その頃の本の購入もされてたような記録が残っています。その後、旧江北銀行の建物も古くなったため売却し、一九七五年に現在のこの場所に引っ越ししました。旧伊香郡農會が使われていたこの建物自体は一九三七年に建てられています。転々と空いたところに引っ越して入るといって、つまりもうヤドリカ状態です。

あ そうしながらもずっと続いてきたんですね。

存続の危機

久 一時的にもうだめだろうみたいな時代もあったようですが。

あ それはいつ頃ですか？

久 昭和の初めぐらいです。杉野が一九三二年に亡くなります。おそらくその頃だと思います。杉野は毎年七百円送っていたと思います。今で言うとおよそ七百万円。いかにここが個人によって守られていたか、それがなくなってからが大変。でも、その後、名士を中心に多くの町の人たちによって支えられてきました。

あ 現在の場所に移ってからはどうでしたか？

久 この辺りってもとは高月町と木之本町と余呉町、西浅井町の四町で伊香郡だったんです。高月町は立派な図書館を作られま

すぎの ぶんや
杉野 文彌さん
プロフィール

1865年(慶應元年)11月27日
滋賀県伊香郡に生まれる

1884年(明治17年)
滋賀師範学校卒業
大阪府で教員になる

1887年(明治20年)
東京法学院に入学

1891年(明治24年)
弁護士になる

1902年(明治35年)
杉野文庫開設する
(伊香郡余呉村中野郷
現 長浜市余呉町)

1932年(昭和7年)
66歳、生涯を閉じる



したが、木之本・余呉・西浅井町には図書館がありません。それはなぜかというと、ここががあるからなんです。ここがいわゆる公共図書館の代わりを担っているということでもあ

あなるほど。

久 ですが、戦後にできた図書館法の規定によって、私立図書館は公的資金を受けることができなくて、運営はもうずっと厳しいです。そんな中、大きな収入源であった近所のパチンコ屋さんが閉店されました。パチンコ屋さんがこの駐車場を借りていらしたのだから、年間かなりの収入だったんですね。それもゼロに。本の購入費も減ってほとんど寄贈本になっていきます。

新たなチャレンジ



久 何とかしないといけないということ、三年前に理事のメンバーが一新しました。まずこの図書館はいいところなのでみんなに知っていただいて、たくさんの人に応援をしてもらおう、助けてもらおうと考えて、古本市や読書会、講演会などのイベントをしたり、ネットで活動を発信し始めたりしたところ、二年前に講談社の野間出版文化賞という、その年に出版にまつわるすぐれた表現活動をした個人・団体に授与される賞に選ばれて。前年には角川武蔵野ミュージアム、伊集院静さん、YASOBIさん、諫山創さんが取られています。

あ 有名な方ばかりですね。

久 うちだけ異例だったんです。全然知られてなくて。東京に受賞に行くのを知ってもらったために、『江北図書館』20年続くいさなふるい私設図書館(岩根卓弘編集美舎)という本を作ったんです。これを持って東京行こうって。そして広く知られる機会でもあるから建物も直すとはちゃんと言いついていこう、そのためにクラウドファンディングもしよう。

あなるほど。集まったお金はどう使われるんですか？

久 まずはトイレも無かったのでその工事をしています。そしてこれからは本の貸し借りだけじゃなくいろいろなコミュニティの場であつたり、ただ人が寄れるような場所としての機能も備えていきたいという思いから、閲覧室とカフェが入る建物も建てています。あとは修繕。柱が腐ってたりしたので、取り替えてもらったり。修理するより新しく建てた方がずっと安いんですけども、三年前に理事のメンバーでしゃべった時に、この建物が

館の一部になっていくから、本と一緒に守っていくと決めたんですよ。

あ 思い入れがあるんですね。

久 はい。で、そうしたところにこの建物が国の登録有形文化財に決まりました。今後、竹まいはそのまま残しつつ、もうちょっと動きやすくなるように全改修しようと思つています。そしてここが持続するためにお金が回るようなものを作りたいと思つています。綺麗になったら水道光熱費だけでなくいるんなものがかかってくるので、作って終わらないうちにそのあとどうやっていくか。次の人にちゃんとバトンが渡せるようにしたいですね。

江北図書館らしさを見つめて



稲館幸子(以下稲) 今、

一生懸命本の整備をして

いるんですけど、まだ整理できていない本もたくさんあって。私は学校の図書館司書もやっているので、新しい本と古い本、両方見れて面白いです。

久 公立の図書館では古すぎて除籍してしまつたような本がたくさん残つていて、一九五五年頃の本とかも普通に閲覧できます。実用書として見るのではなくて、心や頭の中の栄養になるという。電子レンジがない頃のお料理の本であつたりとか、パワハラセクハラが全開だった時代の女性の生き方とか。今、もう一回見方を自分の中で整理して考えてもらつたら新しいことが見えてくるんじゃないかなという部分でもあるので、そういうものを伝えていくのがこらしさかなと思つています。公立の図書館では新しい雑誌やベストセラー本なんかがいっぱい入つてきて、古くなったものから捨てられるのが普通です。でもうちでは古いの

がいい場合もあって、面白い場合があるので、質を大事にして置いています。

稲 今滋賀大学に預かってもらつている、いずれ戻す予定の古い本のリストがあるんです。それを見ても例えはと謝野晶子と謝野寛(鉄幹)が結婚して、その時の様子を書いた『巴里にて』という本があるんですよ。「お、あるじゃん!」とか思つて。

あ 養老孟司さんが来館されたときに「新しい本なんて要らない、そこは公立の図書館があるでしょ」と言われたんですけど、まさにその通りですね。

久 そうなんです。そうして古いものを大切にしながらも創設者の青少年のためにという志を大切にしているもので、子どもの本はなるべく新しいもの、長く読み継がれるようなものを選んで置くかと思つています。

あなるほど。また、趣のある雰囲気かともいいですね。

久 この雰囲気が好きなのはもう何時間でもいけてください。ここ数年はわざわざ関東からや、他にもいるんなところから来てくださって。今来館者の八割がそういう方です。そういった状況も踏まえて、ここは私立なので行政区域に限らず期限内に返してくださいならどなたにも借りていただけるようにしました。

稲館幸子(以下稲) 今、

稲 暖かい時期は観光の人がいっぱい来られます。土日なんかはね。

久 で、みなさん様に「ああ面白い図書館やったね」って帰ってくださるので、それがこの良さなのかと思います。本に囲まれてるっていう感覚を受けてくださるとか、何か懐かしいって言ってくださったりしますね。近所の利用者の方も大根を持って来てくださったり、そういった昔からの感じは今も普通にあります。ここはまだまだ電算化されてないので、カウンターでお話ししながら貸し出ししています。今、新しい図書館は機械で全部自分でするんです。うちはその対極で。あえて今の方法を残していこうかなと思つています。

あ 検索はパソコンで出来るんですか？

久 いえ、それもないので、あの本借りたいなと思つたらスタッフに言ってもらつと、スタッフの頭の中で(笑)。でも、ないものが多いのでどっちかと言つたら目的を持たずに歩いてもらう方が面白いですね。こんなあるわ!という楽しみ方。図書館をさまようっていうか、森を歩きたいな感覚で見ると、思いがけない出会いがあるのが魅力かなと思つています。現在、ここができてから百二十年ほど経つんですけども、その百年というスパンでまたその先が見られるようにしたいなっていうのが今後の展望でもあるんです。

あ 豊かな読書文化が育まれるこの場所がこれからも続くといいですね。

暮らしのコラム

図書館の窓の向こう側

むらかみ さとる
村上 悟 碧いびわ湖 代表理事



ぼくの好きな図書館には、大きな窓がある。

その一つは、長浜市の高月図書館だ。ぼくが高校2年の春に開館。友人のすすめで訪れた。館内は明るく開放的で、それまで図書館に抱いてきた暗いイメージが覆された。東に面した大きな窓の向こうには、庭の緑と湖北の山々が広がっていた。親子で絵本を読むスペースもある。漫画もある!雑誌も充実している。

高月町の図書館なのに、余呉町民のぼくにも快く貸し出し

てくれた。写真、芸術、生物、環境、心理...惹かれるままに読んだ。いろんな人々の言葉に触れ、多彩な世界を知った。一冊一冊の本もまた、世界に開かれた窓だった。

本を読む以外の楽しみもあった。M館長のおしゃべりだ。気さくで、かつ教養の深い人だった。大学生になってもこの図書館に通い続けたのは、彼のおしゃべりが楽しみでもあったからだ。

あれから約30年。いま通う日野町立図書館も、東面に大きな窓がある。田んぼが広がり、奥には綿向山が鎮座している。ぼくはここでも、館長のおしゃべりを楽しんでいる。

H館長は、館内に中高生の居場所スペースを設けたり、ユースワークの学習会を開いたり、若者の居場所づくりに力を注いでいる。動機をたずねると、彼の口から「秘密基地」という言葉が発せられた。H館長は言う。若者は本来、大人に反抗するものであり、自分たちだけの「秘密基地」をつくる経験が大

切だ、と。

思い返せば、ぼくも高校生のとき、友人の発案でフリーペーパーを手作りした。社会への疑問や憤りを表現した。記事を書いた友人の多くが、図書館に通っていた連中だった。そうか、図書館はぼくらの秘密基地だったのか。フリーペーパーはぼくらの反抗プロジェクトで。

もしやと思い、H館長に、M館長をご存じか尋ねてみた。すると会ったこともあるという。「彼の「選書」論が独特だね」と、M館長が書いた私物の本を2冊、差し出してくれた。思わず「貸してください」と頼んで借りた。M館長が見ていた世界を味わえるなんて!

さて、この3月でH館長は日野町立図書館を退職することになった。だからぼくが借りた本は、3月末が「返却期限」だ。4月からは、どんな人が館長になるのだろうか。大きな窓を、好きだといいな。